

須賀ちんゲノム

根上生也 著

世の中にはいろいろな懸賞があって、いろいろな賞品がある。そういえば、昔、コーラか何かのキャンペーンで、それに当たるとスペース・シャトルに乗れるという懸賞があったと思う。あれは誰が当たったのだろう。

確かに、スペース・シャトルに乗れるというのもすごいけれど、僕が当たった賞品だってすごい。それは、自分の「ゲノム」を教えてくれるというものだ。確か、2000年にアメリカが「ヒトゲノム」を読み切ったことになっているけれど、自分のDNAの塩基配列を知りたいと思っても、普通の人にはそんなことはできない。それを知ることになった僕は、なんてラッキーなんだろう。

そもそもその懸賞は、遺伝子組み換えポテトで作ったポテトチップスを売り込もうとするキャンペーンだった。海外では、遺伝子組み換え食品がけっこう浸透しているらしいけれど、日本では遺伝子組み換えにアレルギーを感じる人が多いようで、いくら値段が安くても、なかなか浸透していかない。そのキャンペーンはそれをなんとかしようという食品会社の作戦なのだと思う。

でも、僕にとっては、遺伝子組み換え食品が体に悪いかどうかなんかもよかったです。というのも、その頃の僕は、3年間も付き合っていた彼女に振られてしまって、自暴自棄になっていたからだ。あの彼女に振られたら、今後、僕と付き合ってくれるような物好きな女の子は現れないと、みんな、無責任に言うし。いったい僕はこれからどうしたらいいんだ。そう嘆く僕を慰めてくれたのは「まっちゃん」こと、松下君だけだった。そして、僕の下宿の部屋で、毎晩、飲むのに付き合ってくれた。

そのときビールのつまみに食べまくったのが、あの安い遺伝子組み換えポテトのポテトチップだった。そして、涙に濡れる枕に落ちていた僕の抜け毛を台

紙に貼り付けて、懸賞に応募した。もちろん、後退が気になるおでこを前髪で隠している僕にとって、現役の髪の毛を抜くわけにはいかない。いずれにせよ、この懸賞に当選したことで、僕は少しだけ明るさを取り戻すことができたような気がする。

そして、送られてきたのは、ずっしりと重たいダンボール箱だった。それを開けてみると、分厚い本が何冊も入っていた。全部で24冊あって、どれも5センチくらいの厚さだ。表紙には、僕の名前が題名のように書いてあって、その下に1, 2, 3と番号がついている。でも、最後の2巻だけは番号ではなくて、「X」と「Y」と書かれていた。中を開いてみると、そこにはATCGがぎっしりと並んでいる。これが僕の遺伝子の中に並んでいる塩基の配列というわけなのか。

しかし、この塩基配列を知って何になるのだろうか。将来、塩基配列の解読が進んで、いろいろな病気に対処できるようになるらしいけれど、現在では、そんなことはないみたいだし。まあ、少なくとも、人に見せて自慢はできるだろうな。

翌日、僕は全24巻の入ったダンボール箱を持って、大学に行った。いつものように、研究棟6階にあるコンピュータ室に行くと、すでに松下君が来ていた。パソコンに向かって、C++の総合環境を開いて、昨日のプログラミングの続きをやっていた。

「おーい、まっちゃん。当たったよ、あのポテチの懸賞」

「ほんまかぁ」

「ほんとだよ。これがその賞品だよ」

「なんや、本かいな」

「本んだけど、中に僕のゲノムが書いてあるんだよ」

「ゲノム？ ゲノムって、なんや」

「ゲノムも知らないの。DNAに書かれている遺伝

情報のことじゃないか。ATCG が並んだやつだよ。」

「ATCG？」

「アデニン、チミン、シトシン、グアニンだよ。その並び順で遺伝情報が決まるんだよ。『生物』の授業で習ったじゃないか」

「そやなあ。で、それがどうしてん」

「やだなあ。あの懸賞に当たると、自分の DNA の塩基配列を調べてもらえるんだよ。その結果がこの本の中に書かれているんじゃないか」

「そうやったんか。ほんなら、見してみいよ」

僕は箱から第 1 巻を取り出して、松下君に渡した。それを見て、松下君は驚いたようだった。

「なんや、こりゃ？ アルファベットがでたらめに並んでいるだけやないか」

「だから、言ったじゃないか。ATCG が並んだやつだって」

「けど、ほんまもんかあ？ こんなん、でたらめ書いてあったって、わからへんやないか」

「えー、そんなあ。でたらめなもんか。ちゃんとした懸賞だったんだよ。インチキなわけないよ」

「そんなん、わかるもんか。でたらめが書いてあったって、こんなん、確かめようがあらへんがな」

「そうだけど...」

「ほんま、おまえは人がいいんだから。だから、女にふられるんや」

「そういうまっちゃんだって、彼女、いないじゃないか」

相打ちになって、やっと話が終わった。

せっかく自慢をしようかと思ったのに、なんだか変な話になってしまった。松下君が言うように、この本に書かれている僕の「ゲノム」はでたらめなのだろうか...

そうこうしているところに、僕たちの指導教官の先生がコンピュータ室に入ってきた。

「やあ、2 人とも来てるんだ。ルービック・キューブのプログラム、もう完成したの？」

「まだです」

松下君は先生の前では標準語を使おうとする。

「先生、これ見てやってください。須賀君がこれを当てたんです」

そう言って、松下君は僕の「ゲノム」の本を先生に渡した。

「何、これ？」

「何だと思いませんか？」

「ううん。A と T と C と G が並んでいるところを見ると、DNA の塩基配列みたいだなあ」

「さすが、天才と呼ばれる先生だけあって、正解です」

「何をおだてているんだよ。でも、これは何の DNA なんだい」

「こいつのですよ。こいつの」

「えっ、須賀ちんの DNA なの？」

「そうです。先生は、自分のゲノムがわかるっていう、あのポテトチップの懸賞を知りませんか？」

「ポテトチップの懸賞？」

「はい。その懸賞でこれが当たったんです」

「へー。そうなんだ。じゃあ、これは須賀ちんのゲノムなんだ」

「そうです」

「すごいねえ...」

先生は、そう言って、僕の「ゲノム」を何ページもめくって見ていった。

「でも、これって、本物なのかなあ？」

「先生まで、そんなことを言うんだから...」

「ごめん、ごめん。疑っているわけじゃないよ。彼女にふられたばかりの人間に、人間不信を招くようなことを言うてはいけないな」

「うー」

「先生、だめっすよ。そんなこと言っちゃ」

「ごめん、ごめん」

先生は、口では謝っているけれど、心は僕の「ゲノム」に奪われているようだった。ATCG の並びがそんなにおもしろいのだろうか。でも、天才数学者を自称している先生のことだから、僕たちにはわからない何かを見出せるのかもしれない。

「実はねえ、この前の日曜日に、実家に行ったんだけど、そこで、母親からおもしろい話を聞かされたんだ」

突然、話題が変わった感じがするけれど、先生の話は、たいてい、今話していることと関係している。初めはその関連がわからなくても、いずれその謎が

解けることが多いのだった。それにしても、また、先生の自慢話を聞かされる予感がする。

「私が3才の頃の話なんだけど、隣の家にヨーちゃんという子が住んでいたんだ。その子は私より1才年上だったんで、私より先に幼稚園に行って、『あいうえお』を習っていたわけよ。それで、こともあろうに、自分は『あいうえお』を知っているぞと私に自慢してしまった。

で、どうやら、私は子供の頃から負けず嫌いだったらしくって、ヨーちゃんは知っているのに、自分が『あいうえお』を知らなかったのが悔しくってしかたがない。それで、親に『あいうえお』を教えろとせがんだわけだ。それに応えて、父親が『あいうえお』の積み木を買ってきてくれた。

つまり、「あ」には「あり」、「い」には「いぬ」の絵が描いてあるやつだ。いったい「ん」にどんな絵が描かれていたのか。絶対に、みんなが連想するようなものではないと思うけど、覚えていないのが残念だなぁ...

いずれにせよ、私はそれを使って自力で『あいうえお』を勉強してしまったわけよ。それで、1週間後には、『あいうえお』を全部言えるようになって、ヨーちゃんに逆襲しちゃったんだ。さらに、母親が言うには、ヨーちゃんが知らなかった『ぱびゅべぼ』まで言えるようになっていたんだって」

「へー。すごいですね。じゃ、先生は3才で『ぱびゅべぼ』まで言えたんですか。また、先生の天才ぶりが発見できましたねえ」

「ヨーちゃんも戦う敵を間違えたって感じですね」
やっと口を挟むタイミングを得たと思ったら、先生はさらに話を続けた。

「そんなんで、驚いてちゃ、だめだよ」

「というと...」

「実は、その積み木には、『あいうえお』だけじゃなくて、『カタカナ』も書いてあった。さらには、裏返すと『ローマ字』も書いてあったんだ」

「ちゅーことは、先生は3才にして、『ローマ字』も読めちゃったんすか？」

「まあ、そういうことになるよね」

「そりゃ、ほんま、すごいですね」

松下君は一生懸命、先生のことをおだてている。い

や、ほんとうにすごいと思っているのかもしれない。確かに、僕もすごいと思うし。

「でだ」

人にはわからない文脈の作り方をするときの先生の口癖だ。

「3才のときから、アルファベットと付き合っている私としては、こういうのを放っておけないわけよ」

そういつて、先生はATCGの並ぶページを開いて、それを僕たちに突き出した。

「須賀ちゃんに、まっちゃん。これを見て、2人は何を思うわけ？」

「何をって言われても、あー、僕のゲノムだなあって思うだけです」

「まっちゃんは？」

「別にないっす」

「何だよ。つまらないやつらだなあ。コンピュータを勉強しているんだから、こういう文字列を見ると、何かに見えてもよさそうなのに...」

「何かって、先生には、何が見えているですか？」

「そうねえ。まだ、ちゃんとは見えていないけれど、アルファベットが並んでいる以上、そこには何か書かれているはずだね」

「それはそうですよ。僕の遺伝情報が書かれているんですから」

「それはそうだけど、そういうふうに、固定的にものを考えちゃだめだ。いいか、たとえば、こういうふうにアルファベットが並んでいるのを見ていると、コンピュータでよく使う16進数の表現に見えてこないかい？」

「16進数っすかあ...」

松下君も先生の天才ぶりや奇抜な発想に驚かされて、きちんと標準語を使えなくなっている。僕も、先生の発想には驚きだけど、あえて突っ込んでみた。

「でも、先生。16進数にはAやCは出てきても、TやGは出てきませんよ」

「もちろん、そんなことはわかっているよ。16進数に似ているというだけのことだけれど、それをヒントにアイデアを膨らせていくんだよ。そうすると、何が見えてくるか...」

先生は、コンピュータ室の窓から外をちょっと見たかと思うと、すぐに自分で答えを出してしまった。

「そうだよ．T とか G とかを仮に 16 進法で使うアルファベットだと思うことにすれば、『須賀ちんゲノム』は何かの数になっているわけだよな．となると，その数は何なんだろう」

「数っすかぁ？」

「先生，でも，この文字列には ATCG の 4 つしか出てこないわけだから…」

僕が最後まで言い終わらないうちに，先生が言い出した．

「さすが，このゲノムの持ち主だけあって，よくわかっているね」

「え？」

「4 つしか文字が出てこないということは，16 進法ではなくて，4 進法ということだ」

「4 進法ですか？」

「そうだよ．ATCG のそれぞれが 0, 1, 2, 3 のどれかを表していると見なせば，このゲノムは 4 進数に変換できるじゃないか．その数がいったい何になるのかを知りたいと思わないかい」

「そうですね」

僕は話の流れで，うなずく羽目になってしまった．

「じゃあ，プログラムの問題だとおもって，ATCG の文字列を入力すると，それを変換した 4 進数が出てくるプログラムを作ってみてくれない．そんなのルービック・キューブの CG を作ることに比べたら，簡単だよな．まあ，1 時間仕事だろうな」

「えー．やるですか？ 1 時間じゃ無理ですよ」

「すぐにしろとは言わないよ．時間があつたらでいい．遊びのつもりでやってみようよ．ひょっとすると，何かおもしろい発見ができるかもしれないぞ」

天才の頭の使い方はよくわからないが，先生はいつもおもしろいことを思い付く．アルファベットの積み木を並べて遊んでいた頃の思い出と，僕の「ゲノム」が重なって，さらにコンピュータと結び付いた．

そういう先生の発想に付き合うつもりで，大学院まで進学してしまった僕たちだし，このお遊びにも付き合っただけのことだから，そんなに難しいプログラミングではない…

それから数日後．先生のアドバイスを受けながら，

僕の「ゲノム」を解析するプログラムがとりあえず完成した．それ ATCG の文字列を入力して，ATCG と 0, 1, 2, 3 の対応と，4 進法の桁数を決めると，それを 10 進数の列に変換するプログラムだ．先生はそのプログラムを当初「ゲノゲノ君」と名付けたが，「君」では幼稚な感じだからと，単に「ゲノゲノ」と呼ぶことになった．

たとえば，その「ゲノゲノ」に次の文字列を入力したとしよう．

ATCTATCGC

そして，A = 0, T = 1, C = 2, G = 3 という対応を入力する．すると，この文字列はいったん次の数字の列に変換される．

012101232

さらに，4 進法の桁数を表す数，たとえば「3」を入力すると，上の数を 3 個ずつに区切って，10 進法に変換する．

$$012 = 0 \times 4^2 + 1 \times 4 + 2 = 6$$

$$101 = 1 \times 4^2 + 0 \times 4 + 1 = 17$$

$$232 = 2 \times 4^2 + 3 \times 4 + 2 = 46$$

要するに，最初の文字列は次のような数列に変換されたことになる．

ATCTATCGC \implies 6 17 46

「ATCG の相補的な関係を考えて，数の割り当てでもその関係を反映させた方がいいかもしれないな」

「相補的ですか？」

「そうだよ．A と T, C と G は互いに他を補う関係になっているんだろ．それを相補的っていうんだよ」

「二重螺旋が半分になっても，そこにはまる相手が決まっているから，もとの二重螺旋が復元できるっていうやつですよ」

「そう．その関係を modulo 4 で考えると，たとえば，A = 0, T = 2, C = 1, G = 3 とするといいんじゃないか．どれに 2 を足しても，それを 4 で割ったときの余りが相手の値になるだろ」

「T に 2 を足すと、 $2 + 2 = 4$ だから、余りが 0 で、A になるということですか」

「そうだよ。G なら、2 を足すと、 $3 + 2 = 5$ で、余りは 1 になるだろ。それは C の値だ」

「そうですね」

僕たちは、先生の提案にしたがって、ATCG の相補的な関係を自動的に実現するように、「ゲノゲノ」を修正した。はたして、その「ゲノゲノ」に、僕の「ゲノム」に含まれている文字列を入力して、数列に変換していくと、何が現れるだろうか？

まず第 1 巻で試してみたけれど、そこには何も発見できなかった。しかし、第 2 巻では、僕のゲノムの一部を変換すると、次のような数列が現れた。

```
AG AC CA AC CC TC AT CT CC AG
CC TA TC CG TC AG AT AG TA CA
CT AT CT CA AG AG TA AG AT CG
314159265358979323846264338327
```

「これって、円周率みたいすね」

「ほんとだ。始めの方しかわからないけれど、そうみたいです」

「確か、このパソコンには数式処理システムの『Maple V』がインストールされていたと思うよ。それを使って確かめてごらん」

僕は先生の言葉に従って、「Maple V」を起動して、円周率の値を確認した。「Maple V」の画面には、円周率が 100 桁表示されている。その値の始めの 30 桁は、まさに「ゲノゲノ」の画面に表示されているものと一致していた。

「こりゃ、すごいわ！」

「もっと先の桁はどうなっているんだ」

「このままじゃ、これしか表示できません。プログラムを変えないとだめです」

「それなら、このままでできる実験を繰り返そう。第 3 巻はどうなっているだろうね」

そして、いろいろと調べているうちに、次の数列が現れた。

```
AT CG AC TA AT TA AC TA AT TA
CA CC TC AA CA CC AT AG CC AG
CT AA AT TA CG CA CG AC AG CC
271828182845904523536028747135
```

「待て待て、まだ次を試しちゃだめだ」

「なんすか、先生」

「よく見るんだ。これは“e”だよ」

「“e”って？」

「高校 3 年生のときに習っただろう。自然対数の底のことさ。 e^x を微分しても、 e^x のままという大事な性質を持つ数のことだよ」

「はいはい」

他にもいろいろと数学に登場する数列が発見されて、その度に先生が解説してくれたが、僕と松下君には馴染みのないものばかりだったので、今となっては思い出せない。

「うーん。驚きだね。須賀くんは知らないにしても、『須賀くんゲノム』の中には、数学がいっぱい詰まっているというわけか。ここまでいろいろなもの一致してしまうと、単なる偶然とは思えないな」

「ですね。偶然の一致だとしても、ほんま、びっくりですわ」

「僕だって、びっくりだよ。僕が数学の塊だったなんて」

「そやで。おまえは人間じゃないねん。宇宙人かと思ってたけど、数学やったんやなあ」

「えー。そんなあ…」

「いったいおまえのどの辺が円周率なんやろなあ」

そう言って、松下君は僕の体のいろいろな部分を見ていた。僕の DNA の中に円周率が仕込まれているということは、その円周率に対応して、僕の体の一部ができあがっていることになる。

「おいおい。2 人は何か大変な勘違いをしているぞ」

「なんすか、勘違いってというのは？」

「いいか。須賀くんだって、れっきとした人間だよ。私たちと同じ遺伝子を持った」

「でも、先生。こいつの遺伝子は円周率なんですよ」

「待て待て。君たちは『DNA』と『遺伝子』を同じものだと思っているだろう」

「えっ、同じじゃないんですか？」

「同じではないよ。『DNA』は ATCG の塩基配列全体が作る分子のことだけれど、『遺伝子』はその一部でしかない。約 30 億対ある塩基配列のうちの一部だけが、遺伝情報に關与していて、その部分を『遺伝子』と呼ぶんだよ」

「へー、そうだったんすか」

「ああ、DNA 全体の中のだいたい 95 % の塩基配列は、人間の体を構成するのには必要ないと言われているんだ」

「95 % ですか。でも、なんで DNA にそんなに無駄な部分があるんですか？」

「なかなかいい質問だね。でも、それは無駄じゃない。もし塩基配列の 100 % が遺伝に必要な情報だったとしてごらん。それだと、宇宙線の攻撃とかで DNA が傷ついて、突然変異を起こしてばかりいることになるだろう。それでは、種を安定して維持していくことができないじゃないか」

「なるほど」

「だから、遺伝情報として大事な部分が異変を起こす確率が低くなるように、『ジャンク』の割合が大きくなっているんだ」

「『ジャンク』って、無駄な部分のことですか」

「そう。無駄と言っても、その存在は生物にとって重要なんだ」

「そういうことかいな。じゃ、たくさん見つかった数列は『ジャンク』の部分に書き込まれていたということか」

「そうだよ。遺伝子の部分までそうなら、もはや須賀くんは人間じゃない。いや、逆に、どの人間の遺伝子にも円周率が隠れているという可能性もあるな」

「そうですね」

さすがに先生はいろいろなことを知っている。

「しかし、待てよ」

「なんすか、先生？」

「まだ、大事な数列が出てきていないと思わないか？」

「というと？」

「素数だよ、素数。数学の中で最も馴染みのある数例えば、素数じゃないか」

「そうですね」

「その素数がまだ現れていない」

「そやなあ」

「でも、このままの方法では、素数が現れなくて当然さ」

「なぜですか？」

「だって、素数はどんどん大きくなっていくだろう。今のやり方は、塩基配列を同じ個数ずつに区切って 10 進数に変換しているじゃないか。だから、1 つの 10 進数として表される数の桁数には限界がある。でも、素数の桁数はいくらでも大きくなるのだから、これではうまくいくわけがない」

「なるほど」

「じゃあ、どうすればいいんでしょうか？」

「そうだな。次の素数の桁数が今よりも大きくなるときには、組にする塩基の個数も増やして、10 進数に変換すればいいんじゃないか」

「なるほど」

「よし！ そうと決まれば、早速、プログラムの変更だ。ま、1 時間仕事だな」

先生はそう言って、僕たちにプログラミングを任せて、コンピュータ室を出ていった。残された僕たちは、2 人で協力しながら、プログラミングを修正していった。

そして、プログラミングの完成。何も発見することのできなかった第 1 巻のゲノムを「ゲノゲノ 2」に入力すると、次のような表示が現れた。

```
T G CC CG TG GC CAC CAG CCG
CGC CGG TCC TTC TTG TGG
2 3 5 7 11 13 17 19 23 29 31 37 41 43 47
```

「まっちゃん、なんだかすごいことになってきたね」

「そやなあ。おまえの DNA って、ほんま、どないなってんやろなあ」

僕のゲノムの秘密が解き明かされた衝撃で、彼女に振られて落ち込んでいた僕の気持ちは、どこかに行ってしまったようだ。

それから数日が経った。待ちに待った奨学金が振り込まれたので、松下君と一緒に飲みに行くことにした。今日はちょっとリッチに「魚や三丁」で刺身三昧といこう。

僕たちは、店の奥まったところにあるテーブル席に案内された。「まずお飲み物を」という店員のおねえさんの言葉に従って、まずは生ビールの中ジョッキを頼んだ。

「今日は、食うでえ」

松下君も僕と同様に奨学金が振り込まれてリッチになっている。とはいえ、結局、いつもと同じような安めのつまみをたくさん頼んでしまった。いつもだとちびちび注文するところを、一度に注文しただけのことだ。

「なんやあ、結局、いつもと同じやなあ」

「そうだね。いつもと違って、テーブルの上が食べ物でいっぱいだけど、並んでいるのは、いつもと同じだね」

「しゃあないなあ。俺たちは…」

「結局、いつもと同じ。それがいつもの僕なんだよなあ」

「そやなあ。それが須賀ちんが彼女に振られた原因かもしれんなあ」

「うー。そうかも…」

忘れかけていた嫌なことをまた思い出してしまった。それを察してか、松下君は話題を変えた。

「しかし、うちの先生、ほんま、変なことを思い付く人やなあ」

「そうだよな。どうすれば、ああいう発想になるんだらうね」

「そやなあ。自分で天才や言うてるだけのことはあるで」

「でも、いつも、自分はずがない大学の先生だって、ぼやいているよね」

「そやそや。自分に時代がついてこうへんから、自分の考えが金には結び付かないって、ぼやいてるんやな」

「大学の先生って、そんなに給料が安いのかなあ」

「どやろ。そんなことないんちゃう。だって、飲み会のとき、たいてい、俺らより多く払ってくれるやないか」

「そうだね。でも、所詮、飲みに行くといっただって、居酒屋だよ。お姉ちゃんがいるようなお店で飲んでるとい話は聞かないし…」

「そやなあ」

そういいながら、僕たちは、知らず知らずのうちに、その居酒屋にいる「お姉さん」たちを目で探していた。

「おいおい、須賀ちん。あの姉ちゃんたち、こっちを見てるで」

「え？」

松下君が目で教えてくれた方向を見ると、確かに、綺麗なお姉さんが2人、こちらを見ていた。そして、そのうちの1人と目が合ってしまった。すると、そのお姉さんは、声を出さずに「はーい」と言って、手で僕に合図した。と思うなり、そのお姉さんは席を立て、僕たちの方にやってきた。

「おいおい。こっち、来るで。どないしょ」

「どないって、どうする、まっちゃん」

僕たちが結論を出す間もなく、そのお姉さんが僕たちのテーブルまでやってきた。タイトなミニスカートから伸びるすらっとして足に、目のやり場に困った。

「こんばんは。おふたりは学生さん？」

「は、はい」

「よかったら、私たちと一緒に飲まない」

「あ、あ、あ」

「そんなに緊張しないの」

「は、はい」

「じゃ、私たちがこっちに来るわね。ここのお勘定は私たちが持ってあげるから、いいでしょ」

「あ、はい」

そのお姉さんは、自分の荷物を取りに、いったん自分のテーブルに戻っていった。

「まっちゃん、どうする？ なんか、すごいことになってきたね」

「どないするもなにも、こんな機会、めったにあらへんで」

「うん」

「それに、あの姉ちゃんたち、かなりいけてるで」

「うん。そうだね…」

あまりの急激な展開に、僕は戸惑っていた。その僕の戸惑いをお構いなしに、事がどんどん進んでいく。そして、2人のお姉さんが僕たちのテーブルにやってきた。

「私が雪子、こちらが夢子」

「よろしくね、夢子です」

どちらも、ミニスカートにスーツ姿で、雪子さんはショートヘアで、夢子さんはロングヘアだった。とても綺麗にお化粧していて、魅力的だ。雪子さんは僕の隣に座り、夢子さんが松下君の隣に座った。

「じゃ、新しいジョッキを頼んで乾杯しましょう。生中でいいわね」

雪子さんは手際よく店員を呼んで、生ビールの中ジョッキを4つ頼んだ。ビールが来るまで、僕たちはお互いに自己紹介した。雪子さんと夢子さんは同じ会社のOLだと言っていたが、緊張していたあまり、僕はそのときに言われたことをよく覚えていない。

「はい、乾杯！よろしくね」

その後、僕たちは何を話したのだろうか？雪子さんと夢子さんの話術に、僕も松下君もいのように転がされていた感じがする。

「さてと。おつまみもなくなったことだし、そろそろ場所、変えましょうか」

「は、はい」

「じゃ、約束だから、お勘定は私たちね」

夢子さんが僕たちの伝表を持って、行ってしまった。雪子さんも、肩に鞆の鎖を掛けて、夢子さんの後を追った。しかたなく、僕たちも席を立った。

「あ、あのぉ。僕、トイレに行ってきます」

「いいわよ。じゃ、外で待っているわね」

「はい」

「お、俺も行くで」

僕は、松下君を連れ立って、トイレに行った。

「まっちゃん、どうする」

「どうするって、こうなったら、行くところまで行くしかないやろ」

「そうかなぁ」

「何、言うてんねん。いまさらこれで帰るって言えるかぁ？」

「うん。そうだよな。2人は外で待っているんだし」

「そやで。今日は全然、金を使わないですんでるんや。せっかくやから、いい思い、しようや」

「うん」

結局、その後、僕たちはカラオケ・ボックスに行った。1次会と同じように、僕は雪子さんと、松下君は夢子さんとペアになって、歌合戦をした。松下君はずいぶんとはしゃいでいて、椅子の上に乗って、踊りながら歌っていた。でも、僕はあんまり歌が得意ではないので、控えめに立って歌っていた。雪子さんはあまり体を動かさずに、可愛く歌っている。マイクを持つ手の小指が色っぽい。夢子さんは、踊り

ながら歌うのが得意なようで、時折、長い髪をかき上げながら、ダイナミックに歌っていた。

そして、1時間くらい経った頃に、終わりを告げる電話が掛かってきた。

「じゃ、カラオケはここまでね。歌い疲れちゃったから、ちょっと休憩しにいきましょう」

カラオケ・ハウスを出た僕たちは、僕たちが足を踏み入れたことのない路地に連れていかれた。そこには、ヨーロッパの古いお城を思わせる入り口のお店があった。その入り口の階段を下りていくと、黒服のお兄さんが立っていて、ドアを開けて、僕たちを中に招いてくれた。

中に入ると、長いカウンターが合って、カウンターの中には2人が3人のバーテンダーが立っていて、僕たちに挨拶をした。

「いらっしゃいませ」

僕たちは、すでに決まっているペアごとに、そのカウンターに並んで座った。

「何にいたしましょう」

「そうねえ...」

雪子さんは聞いたことのない長い名前のお酒を頼んだ。

「須賀ちゃんちゃんは、何がいいのかしら？」

「う、僕は、あんまし、こういうところに来たことがないから...」

「そうね。じゃ、私が頼んであげるわ。須賀ちゃんだったら...」

雪子さんは、やっぱり僕の知らないお酒を頼んだ。

「それでいい？」

「はい」

結局、僕のところに来たお酒は、グレープフルーツの味がするお酒だった。でも、ソルティー・ドックではないようだ。雪子さんの方は赤いお酒だった。

「どう？さっぱりしていいでしょう」

「はい。おいしいです」

松下君はどうしているかと見ると、夢子さんとラブな感じで、熱心に話をしていた。一方、僕はだいぶお酒が回っているようで、自分が何を言っているのか、よくわからなくなってきた。雪子さんの話に相槌を打っていただけかもしれない。そうやって、どのくらい時間が経ったのだろうか。

「あちらは、あちらで、仲良くやっているみたいだし、私たちもこの辺で行きましょうか？」

「はい」

僕は雪子さんの言葉の意味がわからないまま、返事をしてしまった。そして、雪子さんの言うままに、松下君たちを残して、その店を出た。

雪子さんが会計をしている間、僕は夜風に吹かれて、酔いを覚ましていた。

「お待たせ」

そういつて雪子さんが僕の右腕に彼女の腕を絡めてきた。雪子さんの髪が揺れて、僕の首元をくすぐる。なんだか気持ちがいい。さらに、雪子さんは、僕に体を押し付けてくる。その圧力に任せて、僕は道を歩いていった。そして、僕と雪子さんは、ラブホテル街に消えていった。

翌日、コンピュータ室に行くと、いつものように松下君が先に来ている。そして、僕の顔を見るなり、大声で質問した。

「おいおい、須賀ちん。昨日はどうなったんや？」

「どうなったって？」

「2人で消えちゃった後に決まってるやろが」

「まっちゃんは？」

「俺なんか、おまえらが消えたかと思ったら、あの女、さっさと帰っちゃったで。で、おまえはどやねん？」

「たぶん、やっちゃったよ」

「なんやて、やってもうたのか！」

「たぶんね」

「たぶんで、なんや？」

「だいたい酔っていたから、よく覚えていないんだけど…」

「覚えてない？ あんなええ女とやったかどうか覚えてへんのか、ほんまに」

「でも、雪子さん、コンドームを振りながら、喜んでいたような気がする…」

「なんやて？」

「だから、やっちゃったんじゃないかなあ…」

「須賀ちんのザーメン見て喜ぶ女かいな。けったいなやっちゃんあ」

「うん。気づいたら、僕、家で寝てたよ。」

「しょうもな」

そこに先生が入ってきた。

「なんだ、なんだ。コンピュータ室で変な話をしちゃって」

「すみません。こいつが…」

「よしてよ、まっちゃん」

「よしても何も無いさ。もう聞いてしまったからね。須賀ちんに新しい彼女ができたって話だろ」

「違いますよ、先生。俺たち、昨日、逆ナンパされてしまったんす」

「逆ナンパ？」

「はい。なんでかわかりませんが、妙に色っぽい姉ちゃんが2人、俺たちのテーブルにやってきて、一緒に飲むことになったんです」

「そりゃ、うらやましい」

「それで、カラオケに行って、カクテルを飲む店に行って。それで、こいつ、その後にその姉ちゃんとやっちゃったらしいんです」

「やめてったら」

「それで、そのお姉さんが須賀ちんの精液を見て喜んでいたらってわけか」

「先生もやめてください、そんな話…」

「わかった、わかった。でも、その話はどこか妙だなあ」

先生は考え込んだ。

「先生、何が妙なんですか？」

「まず第一に、君たちがなぜ逆ナンパされたのかだ。普段、もてないはずの君たちが…」

「先生え」

「しかし、それが事実だとすると、その逆ナンパには何か、わけがあるはずだ」

そう言って、先生は天井を見ながら、また考え込んだ。

「で、まっちゃんの方は、途中で捨てられてしまったんだろ？」

「まあ、そんなところですよ」

「なぜ、須賀ちんだけがいい思いをできたのか？」

「そやで、なんで、おまえばっか」

「そう言わないでよ。よく覚えていないんだから。そう僕たちがやりとりしている間に、先生は何かをひらめいたようだ。」

「なるほど」

「先生、何なるほどなんですか？」

「須賀ちんとまっちゃんの違いだよ。2人の違いが、違う結果を招いたんだ」

「え？」

「その違いって、何です？」

先生は口元に笑みを浮かべて、パソコンの横を指差した。そこには、僕の「ゲノム」が書かれた例の本が置かれていた。

「これですか？」

「そう『須賀ちんゲノム』だ。須賀ちんにあって、まっちゃんにないものというえば、この本だろう」

「そうですけど、それがどう逆ナンパと関係があるんすか？」

「勘の悪いやつらだなあ。ゲノムといえは、DNA だろ。DNA といえは、精子じゃないか」

「はあ？」

「その女の目的は、須賀ちんの精子だ。逆ナンパは、それをゲットするために仕掛けられた罠だったんだ」

「えー！」

「つまり、そのお姉ちゃん2人は、どこかの産業スパイだな」

「産業スパイですか？ なんでまた、産業スパイがこいつの精子をほしがるんすか？」

「だって、須賀ちんの DNA の中には、数学が詰まっているんだぞ。その『くのいち』は『須賀ちんゲノム』の中の数学がほしいんだ」

「そんなあ」

先生は、なんて変なことを考えるのだろう。僕の DNA の中の数学を産業スパイが狙っているなんて。

「先生、でも、こいつの DNA の中に入っている数学だって、素数とか円周率とかじゃないですか」

「そうだな」

「そういう数列だったら、べつに須賀ちんの精子を狙わなくて、手に入るじゃないですか」

「確かにそうだな。でも、何かあるような気がするんだが…」

「それに、先生。そういう情報がほしければ、僕の精子なんか盗むよりも、この本を盗んだほうが簡単じゃないですか」

「ますますそのとおりだ…」

そう言ったものの、先生は自分の考えを捨てていないようだった。独りでうろつきながら、自分の考えを正当化する他のアイデアを探しているようだった。そして、僕たちに質問した。

「精子がほしいということは、どういうことだ？」
それに松下君が答えた。

「普通だったら、子供を作りたいってことじゃないですか」

「それだ『須賀ちんゲノム』ではなくて、須賀ちんの子供がほしいということだ」

「えー。僕の子供ですかあ？」

またまた、先生は変なことを言い出すんだから。

「先生、なんであの女たちは須賀ちんの子供がほしいんですか？」

「まあ、待て待て『須賀ちんゲノム』ではなくて、須賀ちんの子供がほしいということは、須賀ちんにはなくて、須賀ちんの子供にあるものが存在するということだぞ」

「何ですか、それは？」

「うーん。質問ばかりしないで、君たちも考えなさい」

「そんなあ。天才数学者の考え方にはついていけまへんがな」

また、先生は考え込んだ。

「わからないときには、基本に戻ることだ」

「基本というと？」

「基本といえは、『須賀ちんゲノム』には素数や円周率が含まれているという事実だろう」

「そうですけど」

「しかし、その事実から考えを巡らしていても、答えに至らないということは、この事実が本当でない可能性がある」

「えー、先生。実際、須賀ちんのゲノムから素数が出てきたじゃないですか」

「いや、私たちがそう思い込んでいるだけかもしれない」

「思い込んでいるだけというは、『ゲノメ』のプログラミングにエラーがあるということですか？」

先生は、僕の質問には答えてくれなかった。そして、独りでだんだん熱くなってきているようだった。

その姿は、先生の体の中に、何かが宿るのを待っている感じだ。

「先生っ」

「待て！」

先生は、僕たちの言葉を手で制止した。僕たちは、先生の異様な雰囲気にも多少戸惑いながら、沈黙していた。先生は、日頃「数学者モード」にギアが入った状態は人には見せないと言っていたが、もしかしたら、今、僕たちはその状態を目撃しているのかもしれない。

そして、遂に、先生が沈黙を破った。

「はっ、はっ、はっ。やっぱり私たちの思い込みだったよ『須賀ちんゲノム』に素数が含まれているというのは、思い込みだ」

「思い込みですか。じゃ、何が真実なんですか？」

「ふっ、ふっ、ふっ。それは『須賀ちんゲノム』にはすべての素数は含まれていないということだ。確かに、『須賀ちんゲノム』の中に素数を発見したが、それは一部でしかない。いくら DNA の中に無数の塩基配列があるといっても、所詮は有限個だろう。しかし、素数は無限個存在するんだぞ。そのすべては有限個の塩基配列では表現できないではないか」

「なるほど」

ここは「なるほど」と言っておかなければいけないと、僕も松下君も思ったに違いない。

「そして、有限個の塩基配列しか持たない私たち生物が『無限』を生み出そうとするならば、子孫を残して、無限の連鎖を作ることだ！」

「はー」

さっきは「なるほど」と言ってしまったけれど、先生の発想にはついていけない。

「要するに、須賀ちんが子供を作れば、その子供の DNA の中に『須賀ちんゲノム』に含まれていない次の素数の列が含まれているというわけだ。その子がまた子供を作れば、その次の素数列が作られていく。これで、素数の無限列が実現できるじゃないか！」

「えー、ほんとですか？」

遂に、僕は先生の考えを疑ってしまった。

「まあ、本当かどうかは実証できないが、そうだと仮定して、すべてを考えれば、須賀ちんに起こったことに辻褄があるじゃないか」

「そんなぁ」

「じゃ、あの女スパイたちは、ゲットした須賀ちんの精液を使って、どこかで子供を作るんですか？」

「いや、本当に子供を作らなくたっていいじゃないか。受精卵が1回細胞分裂をすれば、それ以後は細胞核の中にある DNA はすべて同じになるのだから、その時点で、受精卵を育成するのをやめればいい」

「そうだとすると、須賀ちんの子供の DNA を作って、どうするんですか？」

「君たちは知らないかもしれないが、暗号理論に従えば、巨大な素数があると、非常にいい暗号が作れるんだよ」

「暗号っすか？」

「そう、暗号さ。この情報社会では、機密保持のために、暗号は超重要だろう。その暗号を作るためには、巨大な素数が必要なんだよ」

「だからって、巨大な素数を作るのに、須賀ちんの子供を作る必要があるんですか？」

「もちろん。そもそも巨大な素数を見つかること自体、コンピュータを使っただけで、すごく難しいことなんだよ。仮に、それが発見できたとしても、コンピュータを使って、いずれはその素数を鍵とする暗号が解読されてしまう。となると、またコンピュータを使って、それよりも大きな素数を作る。そして、それが解読されると、イタチゴッコさ。だから、コンピュータとは別のメカニズムで素数を生成することができたら、それは画期的なことなんだ。」

その鍵を握るのが『須賀ちんゲノム』というわけだ。須賀ちんの子供を作るだけで、次々と巨大な素数が作られていくとしたら、それは大変なことなんだぞ」

「先生、大変なことは理解できるけど」

「いや、本当のところはわかっていないだろう。いいか。須賀ちんの子供が生まれたとすると、その子の DNA の中には、人類が未だ手にしたことの無い巨大な素数が含まれている。それを使った暗号で特許をとれば、とんでもない大金が手に入るんだぞ。さらに、どういう仕組みで、須賀ちんの子供の DNA の中に新たな素数列が組み込まれていくかを解明すれば、いわゆる DNA コンピュータが作れることになる。その DNA コンピュータの仕組みで特許をと

れば、どれほど金が入ってくるのか。だから、産業スパイが須賀ちんのゲノムではなくて、精液を狙うんだ...」

「うー。僕が子供を作ると、そんなに大金持ちになれるのかぁ」

先生の話にはついていけない部分も多いが、僕が子供を作ること大金持ちになれると聞いて、僕はなんだか嬉しくなってきた。

「おいおい、須賀ちん。何を考えてんねん」

「僕の子供のことだよ」

「子供ってなぁ、おまえ1人では作れへんやぞ。子供を作る前に、彼女やろが。彼女もおらん者が、どうやって子供を作る気やねん」

「そんなことわかってるよ」

松下君の言葉で、僕はまた忘れかけていた嫌なことを思い出した。僕を幸せにする天才数学者の理論に酔いしれていたっていうのに。

そこに、僕の携帯電話の着メロがなった。

「はい。あ、はい」

その電話は雪子さんからだ。そして...

その後、先生が心配していたようなことは起こらなかった。雪子さんは僕の精子を狙う女スパイなどではなく、実際、普通のOLだった。つまり、いくらヒトゲノムの解析が進んだ時代だとはいえ、時代はまだまだ天才数学者の発想には追いついていなかったわけだ。

それから、10年後。僕は雪子と結婚して、幸せな生活を送っている。そして、僕たちの初めての子供が生まれた。名前は「孝雪」という。はたして、孝雪のDNAの中には次の素数列が含まれているのだろうか。

実は、僕は修士課程を修了した後、先生の紹介もあって、ゲノムを解析するコンピュータを開発している会社に就職した。本当はゲーム会社に就職したかったのだけれど、いつも面接で失敗してしまって、希望の会社には就職できなかった！「ゲーム」と「ゲノム」だと一文字違いだからと先生に説得されて、今の会社に就職することになった。そして、僕はゲノム解読装置の普及版を開発する仕事をしている。

その1号機が完成したとき、試運転の実験台として僕のDNAを使うことを提案した。というのも、ポテトチップの懸賞でもらった僕のゲノムの本が本物かどうかを知りたかったからだ。でも、僕の本心はスタッフのみんなには秘密にしていた。

「やっぱり本物だったんだ」

30億もある塩基対のすべてを調べたわけではないけれど、全24巻のどこを勝手に開いてみても、そこに並ぶ塩基配列と同じ配列が実験結果のデータの中にも発見することができた。それなら、僕が持っている本に書かれている塩基配列は本物だということは、まず間違いない。となると、孝雪のDNAはどうなっているのかが気にかかる。

この思いを雪子さんに話すと、雪子さんはこっそり孝雪のDNAを調べようと言い出した。もちろん、僕もその提案には大賛成だ。でも、こっそりと調べることもない。僕はゲノム解読装置の2号機の試運転をするときに、孝雪のDNAを使おうと申し出た。そして、自分の息子のデータなのだからと言って、そのデータをMOディスクに入れて持ち帰ることを許可してもらった。

孝雪のゲノムは簡単に手に入ったけれど、大昔に作った「ゲノゲノ」をパソコンのハードディスクの中から探し出すのに苦労した。そして、実験。

しかし、孝雪のゲノムの中から数学を感じさせるものを発見することはできなかった。でも、もしかすると、僕たちにはそれが気づかないだけなのかもしれない。先生が言っていたように、僕のゲノムに含まれている素数の続きが孝雪のゲノムに含まれていたとしても、はたして僕たちにそれがわかるのだろうか。

いずれにせよ、僕たちには先生の予言を支持する現象を発見することができなかった。そう落胆している僕を見て、雪子さんが言った。

「孝雪はあなたの子供であると同時に、私の子供でもあるのよ。私は数学は全然得意じゃないから、私の遺伝子が混ざって、あなたの遺伝子の中の数学を壊してしまったのかもしれないわね」

そうかもしれない。だとすると、僕のDNAに隠されている数学を継続しようとする、結婚相手を慎重に選ばなければならないことになる。でも、い

まさらそんな選択ができるわけがない。

「私の遺伝子は、あなたの遺伝子にどんな影響を与えてしまったのでしょうか」

なるほど。そういう発想で考えるのもおもしろい。そのメカニズムが明らかになると、先生が昔言っていたような DNA コンピュータの秘密がわかるかもしれない。そう思い立って、僕は雪子さんから髪の毛を1本もらった。今度は、こっそりとゲノム解読装置を使うことになる。

再び、パソコンの画面を見つめる僕と雪子さん。

「私が見ても、何なのか全然わからないわ」

「うん。僕が見たって、この数列に何が含まれているのかわからないよ」

「せめて、これが文字だったら、私にも何かひらめくかもしれないけれど、数字だとちょっとねえ」

「そうか、文字か！」

僕は雪子さんの言葉から、先生がよく言っていた言葉を思い出した。

— 人は状況に縛られてものを考え、理解する。でも、天才はその状況を変えてしまって、問題を解決するんだよ。

つまり、僕は「数学」という状況に縛られすぎていた。だから、ATCGを数字に変換することしか考えていなかったのだ。ATCGのそれぞれを4進法の数に見立てて数字に変換していたけれど、それを4ビットのデータだと思えばどうなるか。塩基対4つを1組にして2バイト・コードだと解釈すれば、ゲノムを漢字混じりの文字列に変換できるではないか！

そして、雪子さんのゲノムを変換すると、そこには「数学」ではなく「文学」が現れた。「徒然草」あり、「枕草子」あり、「源氏物語」あり、「我輩は猫である」あり、「雪国」あり。雪子さんのゲノムには、日本の文学作品の有名なフレーズが隠されていたのだった。となると、この要領で孝雪のゲノムを変換すると何が現れるのだろうか。

そこには、なんと次の一文で始まる部分があった。

— 事の始まりは、一通の電子メールだった。

「何なのかしら、この文？」

「これは僕の先生が書いた数学小説『第三の理』の最初の文だよ」

父親の「数学」と母親の「文学」が結ばれて、生まれた子供が「数学小説」というわけか...

2000/11/3